The Japan Association of College English Teachers (JACET)

【書　評】

福田陸太郎(監修)／東京成徳英語研究会(編著)(2004)
『OED の日本語 378』
378 Japanese Words in the Oxford English Dictionary

Tokyo: Japan
論創社,　xxiv + 578pp.

大　森　裕　實
愛知県立大学

キーワード：国際共通語，オックスフォード英語辞典，借入日本語，英語語彙
keywords　: lingua franca, OED, Japanese loanwords, English lexicon

最近の日本における外国語教育、とりわけ英語教育の問題に、従来看過されてきた「国際共通語(lingua franca)としてどのような形態が適当か」という視点、すなわち「国際相互交流言語の有り様」がかなり重点的な比重を占めるようになってきたことは、当該問題の解決に新しい局面を迎えたことを示唆している。「目的言語」から「手段言語」を経て「交流言語」の役割を担う存在として英語をとらえるべきと（長年にわたって）主張する鈴木孝夫は最新刊『アメリカを知るための英語、アメリカから離れるための英語』(2003)においても、その第Ⅱ章を「＜日本＞を発信するために――英語と＜日本語の国際普及＞は車の両輪」と題して、文化交流のための発信型日本語の必要性を説いている。また、英語支配の構造に鋭くメスを入れてきた津田幸男は『英語支配とは何か――私の国際言語政策論』(2003)を上梓して、「＜英語は国際語＞に騙されるな」と警鐘を鳴らす。他方、逼迫した現実問題として、21 世紀における大学英語教育について歴史的視座から問題提起したものに拙稿「教養主義と実用主義の相即相入関係――21 世紀における大学英語教育を考える――」『言語研究と英語教育』第 6 号(2002)があり、同趣の観点に立脚し、より幅広く「国際英語」という概念を念頭においた日本人の英語教育観を田辺洋二『これからの学校英語――現代の標準的な英語・現代の標準的な発音』(2003)は提示する。また、世界語としての英語を意識したものに Robert McCrum, et al. *The Story of English* (1986) や David Crystal, *English as a Global Language* (1997)が以前からよく知られているが、最近のものでは Laurie Bauer, *An Introduction to International Varieties of English* (2002)や

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

Jennifer Jenkins, *The Phonology of English as an International Language* (2000)が有益な情報を提供してくれる。

さて、上述のように、英国語としての英語、米国語としての英語という伝統的観念から脱却し、世界語／国際共通語としての英語という新しい概念を思考の中心におく時に、日本の国際社会に占めるその地位と役割を併せて考慮するなら、その趣の「英語」のなかにどのような日本語が借入され、その意味が本義的意味で定着しているのか、あるいは歪曲されて定着しているのかは、重要な関心事となるであろう。従来より、日本の外国語・外国文化受容史の観点からの著述に関しては数多確認できるうえに[1)]、外来語としての英単語については、それが意味の側面からも発音の側面からも二重に歪曲(distortion)されているということを指摘する元駐日大使ライシャワー(Edwin O. Reischauer)の著わした *The Japanese* など一般読者を啓蒙してきたものが存在する。事実、私たちの日常生活には、アルミ(aluminum)、インフレ(inflation)、デフレ(deflation)、アニメ(animation)、パソコン(personal computer)、デパート(department store)、ハンスト(hunger strike)のように勝手に英単語の後半部分を切った和製英語や、クリーニング(dry cleaning)、ホーム(platform)、ネル(flannel)、キャスター(newscaster)、ドライバー(screwdriver)、ニス(varnish)のように今度は英単語の前半部分を切り取った和製英語が氾濫する。オランダ語由来のスコップ、ブリキ、ペンキ、ランドセル、レッテル；ポルトガル語由来のトタン、カステラ、パン、ビロード、ブランコなどは比較的素性が分かりやすいが、ドイツ語由来のアルバイト、エネルギッシュ、カルテ、ギブス、ゲレンデ、ノイローゼ；フランス語由来のアベック、アンケート、カフェオレ、コンクール、ピーマン、ピエロ、ポタージュ、マロン、バカンスとなると英語からの借入語彙だと安易に思い違いする傾向も認められ、それに細心の注意を払った英語教材さえ存在する[2)]。ところが、それとは対照的に、英語の中に借入された日本語を網羅的に調査し解説したものは極めて少なく、輸入超過型でバランスを欠いた状況が今なお展開しているとの印象が強い[3)]。その意味において、英語が国際交流言語へとその姿を変貌させつつある 21 世紀を迎えたこの時期に、本書の上梓が企てられたことは実に時宜にかなったものであり、その意義もまた大きいといえよう。

本書は「はしがき」からも看取できるように、監修者の福田陸太郎の肝煎りで組織された「東京成徳英語研究会」（東京成徳短期大学）が 1995 年から 1998 年にかけて精力的に研究活動してきた成果を『西洋の日本発見——OED に見られる日本語』と題する全７集にまとめて刊行したものを再編成して、改めて 1 冊本として公刊したものである。『西洋の日本発見——OED に見られる日本語』の存在は、本書の上梓に 5 年ばかり先行して出

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

版された、原口庄輔・原口友子（編訳）『新「国際日本語」講座——英語辞書の中の日本文化』（洋販出版，1998）の言及から承知していた。原口&原口（1998）の方は *The New Shorter Oxford English Dictionary*, 4th ed.（1993）に記載された日本語を調査・分析したものだが、本書の方は *The Oxford English Dictionary*, 2nd ed.（1989）に収録された日本語を調査・分析したものであり、重複する語彙も少なくはないが、調査対象とする辞典をSODとOEDという別物に特化することによる棲み分けがなされている点から、この2つの著作が相互補完的役割にあることは、読者にとって僥倖という他はない。

ところで、本書における「英語への日本語借入語」調査は、最終的にはOED〈第2版〉20巻（1989）［収録語数約61万語］の調査に拠り、その結果、本書はあたかも1冊の辞書の体裁を成し、総計378語の見出し語をアルファベット順に配列して、そのそれぞれについて解説を附している。従って、本書の90%にあたる511頁は各項目の記述に費やされており、それに「時代の項目」（OEDに採択されている日本の時代7項目：縄文・弥生・奈良・平安・鎌倉・江戸・明治）に関する記述が12頁分続き、巻末には「日本語リスト」と引用文献の「略記表」が掲載されて全体を構成する。巻末「日本語リスト」には、OEDに載った語形、該当する日本語、引用された最古の用例の出典年、用例数、OEDに初めて載った版が明記されている。ここで、「OEDに初めて載った版」の明記が可能となるのは、編著者の東京成徳英語研究会が、OED〈第1版〉12巻（1928）、SUP〈第1補遺版〉1巻（1933）、SUP〈第2補遺版〉4巻（1972～1986）すべてを精査して、当該378語の日本語について[4]、それらがどのような歴史的過程を経て英語に受容されたかを明らかにしているからである。

・OED〈第1版〉	（1928）	45語
・SUP〈第1補遺版〉	（1933）	41語
・SUP〈第2補遺版〉	（1972～86）	279語
・OED〈第2版〉	（1989）	8語

ここから、Robert Burchfieldが責任編集したSUP〈第2補遺版〉において、飛躍的に日本語が英語に採り入れられた事実を窺い知ることができる。SUP〈第2補遺版〉第1巻の刊行は1972年だが、新造語や新語句を中心に採録する編集作業は、1957年に編集主幹に就任したBurchfieldの下で精力的に始まった。1961年に米国で改訂出版された *Webster's New International Dictionary of the English Language*〈第3版〉での百科辞書的特徴のいっそうの強化が、OED補遺版に収録する語彙選択に少なからぬ影響を与えたものと考えられる。20世紀後半には、英語はただ単に「英国のことば」や「米国のこと

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

ば」といった枠組ではとらえることのできない「多文化型言語」に変貌しようとしていたからである。SUP〈第2補遺版〉に日本語からの借入語彙数が卓立しているのも、それが編纂された時代と同時代の人々の意識を反映した結果だといえる。さらに興味深いことには、原口&原口（1998）の調査したSODについて比較対照してみると、収録語数の増大時期が一致する事実（おおよそ1970～1990年）が明瞭となり、同趣の傾向を追認することができる。

・SOD〈第1版〉	(1933)	30語
・SOD〈改訂版〉	(1936)	30語
・SOD〈第3版〉	(1944)	32語
・SOD〈改訂増補版〉	(1973)	32語
・SOD〈第4版〉	(1993)	335語[5]
☆SODとOEDに採録されている日本語総計		444語（396＋48）

原口&原口（1998）に拠れば、SODにはあるがOEDにはない語彙が69項目確認されているが、そのなかで、[改善、看板、カラオケ、日経、新幹線、商社/総合商社、総会屋、東京人、ウォークマン] などは最近の日本の経済社会をよく投影している。採録語彙の鮮度がOEDよりSODの方が高いことは想像どおりである。その理由はいたって簡単で、OEDの引用文献一覧がそれを端的に示している。もちろん、OEDの用例の出典は、文学作品から新聞雑誌に至る多様なもの 2,165 冊を数えるが、引用頻度の高いものから順に、ケンペル『日本誌』(1727) ＜57 例＞、ブリタニカ百科事典＜50 例＞、タイムズ紙＜47例＞、日本アジア協会紀要＜42例＞となる。その他、チェンバレン『日本の事物誌』(1890) ＜26例＞、リーチ『日本の陶工』(1960) ＜24例＞、ミッドフォード『古い日本の物語』(1871) ＜23例＞をあげることができるが、前出のBarnard Leach著 *A Potter in Japan* を除いては、いずれも18世紀～19世紀のものばかりである。

本書に記載された日本語語彙のなかで、1970年以降が初出のものとしては、[tamari(溜り) 1977] [tsutsumu（日本式包み）1975] [sumotori（相撲取り）1973] [shokku（ショック）1971] [shabu-shabu（しゃぶしゃぶ）1970] [shishi（獅子）1970] [teppan-yaki（鉄板焼き）1970] [nunchaku（ヌンチャク）1970] が、またその少し前のものとして [zaikai（財界）1968] [shiatsu（指圧）1967] [yokozuna（横綱）1966] [yakuza（やくざ）1964] [oshibori（お絞り）1959] などが目を惹く。一方、最古の引用は [bonze（坊主）1552] であり[6]、[Kuge（公家）1577] [katana（刀）1613] [wacadash（脇差し）1613] [tatami（畳）1614] [shogun（将軍）1615] [kami（上・神・守）1616] [mochi

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

（餅）1616］［samisen（三味線）1616］も古い。さらに、頻出度の高いものは①［tycoon（大君）1857］27 例[7]；②［kamikaze（神風）1896］25 例；③［soy（醤油）1696］23 例；④［samurai（侍）1727］22 例；⑤［tatami（畳）1614］21 例となる。

ところで、SOD にはなく OED に確認できる興味深い語彙に［Shokku（ショック）］があるので、その詳細をみておきたい。

Shokku は、英語の shock が外来語として日本語の中に採り入れられ、カタカナ語としてのショックが定着した後、再び「逆輸入」の形で英語に里帰りした特異な語彙であり、その特徴は、まさにライシャワーが指摘した二重の歪曲を示す好例であるといえる。すなわち、その音韻形式は英語本来の［ʃɑk］ではなく、語末に母音色をにじませた開音節で終わる［ʃoku:］であり、意味も「日本の政治・経済に関する衝撃」のことに特殊化されたものである。OED[2] には［Jap., f. SHOCK sb.[3]］Used *joc.* <jocularly> to denote a shock or surprise in political or economic affairs concerning Japan.とある。引用例は「ニクソンショック」（2 例）と「オイルショック」（1 例）である。The President had convulsed Japan ... with the 'Nixon *shokku*' — his spectacular policy shifts on China and the economy. (*Time* 4 Oct., 1971) ; Indeed, the Nixon Administration's diplomatic *shokku* in 1971 did lasting damage to Japan's relations with the U.S. (*Time* 3 Sept., 1973) ; The Japanese were able to cope with their frightful 'oil *shokku*' with far more self-restraint than marked the response of other countries to the oil embargo.(*Encounter* Sept., 1978).
この 1971 年の初出例は、*Time* 誌 10 月 4 日号の Cover Story にもなった（掲載記事タイトルは Japan: Adjusting to the Nixon Shokku）。1990 年代には、*Forbes* 誌から Finance Shokku (1992) ; Rent Shokku (1993) ; Learning Shokku (1994) ; Job Shokku (1995)が確認され、*Economist* 誌からは（米国大和銀行事件に関連して）Wall Street Shokku (1995) が、また *World Press Review* 誌からは Daiwa's Wall Street 'Shokku' (1995)が確認されたとの報告がある。どの程度まで、日本社会の右往左往ぶりを揶揄したものかは分からないが、少なくとも英語圏のジャーナリストの冷ややかな視点を示唆しているといえよう。

その他、気のついた点としては、SOD には、副詞起源で唯一採録されている［skosh（少し）］<noun. *US slang*. M20. [Jap. *sukoshi*.] A small amount, a little. Freq. in *a skosh*, somewhat , slightly.> や、動詞起源で名詞として採録された特異な［tsutsumu（包む）］<noun. L20. [Jap.= wrap.] The Japanese art of wrapping items in an attractive and appropriate way.> を見出だすことができるが、OED では前者の名詞化された副詞 *Skosh* は収録されてはいない。

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

ここで、少し長くなるが、本書採録の見出し語を列記して、読者の便宜に供する。なお、紙幅の都合上、対応する和訳は割愛するので、推測されたい。

A adzuki / aikido / Akita / ama / amado / Arita / aucuba / awabi

B bai-u / banzai / baren / bekko / bonsai / bonze / bunraku / bushido

D daimio / dairi / daisho / dan / dashi / dojo

E Eta, eta

F fusuma / futon

G gagaku / geisha / Genro / geta / ginkgo / go / gobang

H habu / habutai / haiku / hakama / hanami / hanashika / haniwa / haori / happi-coat / harai goshi / hara-kiri / Hahsimoto / hatamoto / hechima / Heian / heimin / hibachi / hinin / hinoki / Hirado / haragana / Hizen / honcho / hoochie

I ikebana / ikunolite / Imari / inkyo / inro / iroha / Ishihara / ishikawaite / itai-itai / itzebu, -boo

J janken / jigotai / jinricksha, jinrikisha / jito / Jdo / johachidolite / Jomon / joro / Jōruri / judo / judoist / ju-jitsu / junshi

K kabane / Kabuki / kago / kagura / kakemono / kaki / Kakiemon / kakke /Kamakura kami / kamikaze / kana / kanji / karate (*n.*)/ karate (*v.*)/ kata / katakana / katana / katsuo / katsura / katsuramono / kaya / Kempeitai / ken (間)/ken (県)/ ken (拳)/ kendo / kesa-gatame / keyaki / Kikuchi / kikyo / ki-mon / kimono / kiri / kirin / koan / kobang / kobeite / kogai / koi / koi-cha / koji / kojic / kokeshi / koku / kombu/ koniak, koniaku / Kōrin / koro / kotatsu / koto / kudzu / Kuge / kura / Kuroshiwo / kurama / Kurume / Kutani / kuzushi / kyogen / kyu

M maiko / makimono / mama-san / manyogana / matsu / matsuri / mebos / Meiji / metake / miai / Mikado / mikan / Mikimoto / Minamata disease / mingei / miso / mitsumata / mochi / mokum / momme / mompei, mompe / mon / mondo / moose / mousmee / moxa / muraji

N Nabeshima / nakodo / Nanga / Nara / narikin / Nashiji / netsuke / ningyoite / Nip / Nippon / Nipponese / Nipponian / nisei / nogaku / Noh, No / nori / norimon / noshi nunchaku

O obang / obi / o-goshi, ogoshi / oiran / ojime / Okazaki / okimono / Okinawan / omi / on / onnagata / onsen / origami / orihon / osaekomi waza / oshibori / O-soto-gari /

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

oyama

P pachinko

R raku / ramanas / randori / renga / ri / richshaw, ricksha / rikka / rin / Ritsu / Rōjū / romaji / ronin / Roshi / rotenone / rumaki / ryo / ryokan

S sabi / saké / sakura / samisen / samurai / san / sanpaku / sansei / sasanqua / sashimi / satori / Satsuma / sayonara / sen / Sendai / sennin / senryu / sensei / sentoku / seppuku / Seto / shabu-shabu / shaku / sakudo / shakuhachi / shiatsu / Shibayama / shibui / shibuichi / Shiga / shiitake / Shijō / shikimi / shikimic / shimada / shime-waza / shimose / Shin / Shingon / Shinshū / Shinto / shishi / sho (升)/ shō (笙)/ shochu / shogi / shogun / shoji / shokku / shosagoto / shoyu / shubunkin / shugo / shunga / sika / shimmia / soba / sodoku / Soka Gakkai / soroban / soshi / Soto / soy / soya / soya bean / soybean / sudoite / sugi / suiboku / suiseki / sukiyaki / sumi / sumi-e / sumo / sumotori / sun / Suntory / surimono / sushi / suzuribako

T tabi / tai / tai-otoshi / Taka-diastase / Takayasu / tamari / tan(反 1) / tan(反 2) / tanka tansu / tatami / teineite / tommoku / tempura / Tendai / tenko / teppan-yaki / terakoya / teriyaki / to / todorokite / tofu / togidashi / tokonoma / tonari gumi / torii / Tosa(土佐派) / Tosa(土佐犬) / tsuba / tsubo / tsukemono / tsukuri / tunami / tsutsugamushi / tsutsumu / tycoon

U uchiwa / udon / uguisu / uji / ujigami / uke / ukemi / ukiyo-e / urushi / urushiol / uta

W wabi / wacadash / waka / wasabi

Y Yagi / yakitori / yakuza / Yamato / yashiki / Yayoi / Yeddo / yen / Yokohama / yokozuna / Yoshiwara / yugawaralite / yugen / yukata / Yukawa / yusho / yūzen

Z zabuton / zaibatsu / zaikai / zazen / Zen / zendo / Zengakuren / zori

最後に、誤植として「はしがき」(vi) 1行目 SIP は SUP の誤りであることを指摘しておく。また、巻末「略記表」が完全ではないことに画竜点睛を欠くの印象を与えることは残念な事実ではある。しかしながら、そのことが本書の価値を過小評価する要因にはならないであろう。それどころか、本書は、英語への借入日本語の辞典としても、また、今日の英語に受容された日本文化について日本語母語話者が改めてとらえなおす際の一助とな

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

る読み物としても、有為の逸物であることは疑う余地がない。日英語語彙を通してみる日英語圏の文化比較に関心を寄せる者——英語教員の多くはそれにあたると思われるが——にとっては、必須の参考図書といってよい。3 年余にわたり地道な共同研究を推進された「東京成徳英語研究会」の労を多としたい。

註

1) 福原麟太郎や梅垣実による一連の日英語比較に関する著述の他にも、矢崎源九郎『日本の外来語』(岩波書店, 1964) や斎藤静『日本語に及ぼしたオランダ語の影響』(篠崎書林, 1967) はまだ記憶に新しい。

2) Haruo Kizuka and Roger Northridge, *Common Errors in English Writing* (マクミラン・ランゲージハウス社, 2001[3], 2004[4]) は好例。

3) 清水護 "Notes on Japanese Words in English Dictionaries," *ELEC Publications*, Vol. Ⅷ (1967) や、R. W. Burchfield and V. Smith, "Azuki to Gun: Some Japanese Loanwords in English,"『英語青年』第 119 巻 (1973. 12) の記事が有益であることを強調しておく。また、最近上梓されたところでは、松田裕『日英語の交流』(研究社, 1991) と伊藤孝治『海のかなたの日本語』(大阪教育図書, 2001) という好著に加えて、加藤秀俊・熊倉功夫 (編)『外国語になった日本語の事典』(1999, 岩波書店) があることも看過できない。俯瞰してみると、英語に借入された Japanese loanwords に対して、近年 (少しずつではあるが) 関心が高まってきていること、まとまった研究書が公刊される傾向にあることが看取される。

4) ここでの語彙数を合計すると 373 語となり、編著者の東京成徳英語研究会が最終的に研究対象として認定した 378 語との間に齟齬が見受けられる。最終段階で認定語彙数に修正が施されたことは本書「はしがき」(viii) に記述がある。

なお、OED〈第 2 版〉は、OED〈第 1 版〉に SUP〈第 1 補遺版〉と SUP〈第 2 補遺版〉に新 5,000 語を加えて編纂されている。従って、OED〈第 2 版〉で新たに加えられた 8 語というのは、SUP〈第 2 補遺版〉第 1 巻で欠落していた [小豆、合気道、海女、雨戸、有田焼、大小、だし(汁)、碁] といったアルファベット順の初めのものばかりである。

5) 原口&原口 (1998) においては、SOD〈第 4 版〉から 335 語を選定して解説を試み

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

ているが、著者みずからも懸念するように（pp. 9-12)、これはSOD〈第4版〉発行時に新聞紙上で報じられ、一般に周知された語彙数に基づくものであり、実際には、著者自身により最初に確認された336語（下位見出し語3語を含む）と、後に追加確認した59語を合わせた語彙（395語）が収録語数ということになる。原口&原口（1998）では、追加確認した59語についての記載は省略されている。また、同書「あとがき」(p. 343）には、OEDとの比較から、「SOD記載の語の総数396」とも記述されており、語彙数に若干の不整合が見受けられることを指摘しておく。

6) 英語に借入された際に、原音がデフォルメされて、原形を容易に復元することのできない語彙に、この［bonze（坊主)］の他にも、［ginkgo（銀杏・いちょう)］［gobang（五目並べ)］［honcho（班長)］［hoochie（うち)］［moose（娘)］［moxa（もぐさ)］［noshi（熨斗)］［ramanas（ハマナス)］［rumaki（ルマーキ<?春巻)］［shibuichi（四分一)］［tenko（点呼)］［todorokite（轟石)］［wacadash（脇差し)］などがある。

7) この［tycoon（大君)］というJapanese loanwordはその語源と発音の関係が複雑な語彙で、松田（1991）に拠れば、OED初版（1928）の語源説明［ad. Jap. *taikun* great lord or prince, f. Chinese *ta* great + *kiun* prince］が後続の英語辞典に多くの影響を及ぼしていると指摘される。*American College Dictionary* (1961), *The Random House Dictionary of the English Language* (1966), *The Oxford Dictionary of English Etymology* (1966), *Webster's New World Dictionary*, 2nd College Edition (1970), *Klein's Comprehensive Etymological Dictionary of the English Language* (1971)はいずれもOEDの記述に依存しているという。また、本稿筆者が確認する限りでは、OED第2版でも、この部分の記述に修正は施されてはいない。正確には、中古中国語の「大君」*taikiuən*が一度日本語に借入され（「大公」の意)、それが今度は日本語（江戸時代、外国に対して用いた「将軍の別号」）として新たに英語に輸出されJapanese loanwordとして定着したという1,000年余の歴史を感じさせる語彙である。米国第16代大統領Abraham Lincolnが「あだ名」としてTycoonと呼ばれたり、初代駐日米国公使Townsend Harrisも勇退後the old Tycoonと呼ばれたという限定的使用法から、最近では、より一般化して「実業界の大立者」という意味を創出している。*eg.* The <u>tycoon</u> of the baggage car objected to handling the boat. 現代日本語ではさしずめ「手荷物車王」のように「△△王」の用法に近い。また、この用法では、tycoonが小文字で表現され、今では一般名詞化していることをよく示している<松田（1991）pp. 136-137参照>。

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers (JACET)

参考文献

Bauer, L. (2002). *An Introduction to International Varieties of English.* Edinburgh: Edinburgh University Press.

Crystal, D. (1997). *English as a Global Language.* Cambridge: Cambridge University Press. (邦訳：『地球語としての英語』(1999). 國広正雄 訳，東京：みすず書房)

原口庄輔・原口友子. (編訳). (1998). 『新「国際日本語」講座——英語辞書の中の日本文化』 東京：洋販出版

早川 勇. (2003). 『英語のなかの日本語語彙——英語と日本文化との出会い』 東京：辞游社

今里智晃. (1994). 「英語に根づけ、日本語起源の語」『言語』vol. 23-8, pp. 6-7. 東京：大修館書店

伊藤孝治. (2001). 『海のかなたの日本語——英米の辞書に見る』 大阪：大阪教育図書

Jenkins, J. (2000). *The Phonology of English as an International Language.* Oxford: Oxford University Press.

加藤秀俊・熊倉功夫. (編). (1999). 『外国語になった日本語の事典』 東京：岩波書店

小稲義郎. (1999). 『英語辞書の変遷——英・米・日本を併せ見て』 東京：研究社

McCrum, R., Cran, W. and R. MacNeil. (1986). *The Story of English.* New York: Viking Penguin Inc. (邦訳：『英語物語』(1989). 岩崎春雄 他 訳，東京：文藝春秋)

松田 裕. (1991). 『日英語の交流——異文化接触のアスペクト』 東京：研究社

三浦信孝. (編). (1997). 『多言語主義とは何か』 東京：藤原書店

大森裕實. (2002). 「教養主義と実用主義の相即相入関係——21 世紀における大学英語教育を考える——」『言語研究と英語教育』vol. 6, pp. 12-35. 名古屋：中部応用言語学研究会

鈴木孝夫. (2003). 『アメリカを知るための英語、アメリカから離れるための英語』 東京：文藝春秋

田辺洋二. (2003). 『これからの学校英語——現代の標準的な英語・現代の標準的な発音』 東京：早稲田大学出版部

津田幸男. (2003). 『英語支配とは何か——私の国際言語政策論』 東京：明石書店

NII-Electronic Library Service